

ある年の秋。僕の部屋の隅に置かれたダンボール箱。置かれたというよりは住み始めた、という方が少しあっている。箱の中には、足を骨折して動けないメスの猫がいる。

これから考える事は、いろいろ、本当にもういろいろあるけれど、とりあえず“彼女”が元気になるまで面倒見る。他の事は今は考えない。そう決めたのが、彼女と箱が僕の部屋に来てから二日目の事だった。

日中、僕は仕事に行かなくちゃならない。だから付きっ切りで看病なんてできない。そこは割り切るしかない。箱の中に彼女とミルクとキャットフードを置いて、僕は仕事に出かけた。

そうは言いながらも、仕事中でも彼女の事が気になって気になってしょうがなかった。足の具合もそうだが、彼女は僕と会ってからまだ何も口にしてない。僕は仕事から帰ると、いつもまずは彼女を確認した。箱の蓋を開け、生きている事にほっと一安心、とばかりもいかず、次の日も、また次の日も、彼女は何も食べなかった。いつものように、箱の蓋を開けた僕を見上げて、『にゃあ・』と細く鳴くだけだった。

しかし四日目、仕事から帰って確認すると、餌がほんの少しだけ、減っていた。

『食べたんだ・・・良かった・・・』



その次の日から、餌の減る量が少しずつ増えていった。ちゃんと食べさえすれば、元気になれるかもしれない。第一関門の心配と安心が少しずつフェードアウト・フェードインしていった。

一週間が経ったころ、まだ立てはしなかったが、次第に彼女は箱の中でガサガサと動くようになってきた。『にゃあ』の声も少しずつ大きくなってきた。僕はふと、昔見た『ドラえもん』の映画を思い出した。確か、のび太が拾った恐竜の卵が孵って、その子がどんどん大きくなってしまつて、恐竜の時代に返そう！みたいなお話だったと思う。まあ、そこまでは大きくならないにしても、彼女がちゃんと元気になれば、いつまでも段ボール箱の中でじっとしている訳

にはいかない。

そう実感させられる日は、意外と早かった。十日目くらいには、彼女はフラフラしながらも立とうとした。すぐに“へにゃ”っと座り込んでしまうが、もう“お座り”の状態を保てるほどになっていた。

それから二〜三日後、いつものように仕事から帰って部屋に行き、ダンボール箱の蓋を開けた。がしかし、彼女が居ない……。は?? どこ? どこだ? 僕はビックリしてあたりを見回した。すると、彼女は箱の中ではなく、僕のベッドの上でお座りしてこつちを見ていた。

『おまえ、箱から出られるくらいになったのか・・・』

ビックリしたけど、嬉しかった。少しふらつきながらも、もう歩ける状態にまで回復したのだ。

そんな時、普段は僕の部屋にあまり来ない母が突然やってきた!

『母さん、あの、これ、話そうと思っただけど・・・』僕がそういうと、

『なに言っちゃってんの。みんな知ってるよ』

と言って母は軽く微笑んだ。そう、家族にはとつくにばれていたのだ。(当たり前っちゃ当たり前だ)。日中も、僕の外出中には時々様子を見てくれていたらしい。そして、『ちゃんと、責任取りなよ』とだけ言っつて、部屋を出て行った。

責任、、、か。



とりあえず、もう命の心配も、足の心配もなさそうだ。僕は当初考えていたように、彼女の飼い主を探す事にした。

『飼い主、見つかるといいな』

僕がそう言うと、彼女は『にゃあ』と一鳴きして、普通の猫のようなしなやかな足取りで、ピョンっと箱の中に自分から戻った。

『おまえ、この箱好きなんだな・・・』

彼女が来てから一カ月後、僕は飼い主を探しに出かけた。

つづく